

東海道五十三次

てくてく歩く日帰り一人旅

太田 康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その③

先回の藤沢宿（6番目）の先に「間の宿」が設けられていて、現在の茅ヶ崎市一帯。そこには松並木が残っていた。国の天然記念物に指定されている御油宿の松並木に匹敵する見事さ。ここの松並木は冬に歩くと菰が巻かれ情緒ある風物詩を成している。この菰、中で松の害虫を冬眠させ、春先に外して一網打尽に焼き払う算段。日本海側では樹木保護のための菰巻きはちょくちょく見かけるが太平洋側では珍しく一見に価する穴場。

さて藤沢宿と対照的に東海道の整備や保存に熱心なのが平塚宿（7番目）。まず宿の入口に「平塚宿史跡絵地図」の図版。並んで横に平塚宿江戸見附跡の碑（普通名詞の見附と固有名詞の見附との相違については後日「見附宿」の項で説明）。



（歌川広重 平塚宿）

以下順に西へ「平塚宿脇本陣跡」、「平塚宿高札場の蹟」、「平塚宿東組問屋場の蹟」、「平塚宿本陣旧跡」、「平塚宿問屋場蹟」、「平塚宿西組問屋場の蹟」、「平塚宿京方見附之跡」、「従是東 東海道平塚宿」の碑と説明板。「跡」と「蹟」の整然たる使い分け。最後の碑は西から来る旅人のためのもの。

JR 平塚駅北口を出てすぐの、東海道へ出る手前の小公園に、怪談『番町更屋敷』の主人公お菊の墓標があった。お菊の父は平塚宿役人であったから。

その他宿場に入る手前の小出川に架かる鳥井戸橋のたもとに「南湖左富士」の碑。（左富士については後日吉原宿の項で説明）。なお旧東海道筋の商店街では日本三大七夕祭りの1つ、「湘南ひらつか七夕まつり」が7月7日の前後5日間にわたって繰り広げられる。

大磯宿（8番目）は2つの顔を持つ海辺の町。江戸時代は宿場町として栄え、明治以降は避暑地、別荘地の先駆的役割を担って来た。日本最初の海水浴場が開かれ、明治の元勳や実業家の別荘が立ち並び、中国洞庭湖のほとり湘湖の南側に似

ていることから湘南と命名されるに及んで、高級別荘地の名をゆるぎないものにした。両方の遺跡を見て行こう。



(歌川広重 大磯宿)

歴史や文化を偲ぶ遺跡としては曾我兄弟の仇討ちにまつわる、兄の曾我十郎と大磯一の美人、遊女虎御前の悲恋の伝説の地である。虎御前が朝な夕な汲んだ化粧井戸が遺跡として残っている。曾我兄弟が討たれた陰暦5月28日は十郎と契った虎御前の涙雨ということで、この日降る雨を「虎が雨」と呼んで季語になっている。広重の「東海道五十三次」の大磯宿にも「虎が雨」として筆太にこの雨が描かれている。その他では日本三夕の1つで西行法師の歌にちなんだ嶋立庵が江戸初期にこの地に創建され、今では京都の落柿舎、近江の無名庵とともに俳諧三大道場と呼ばれている。江戸時代は「でんりゅう庵」と呼ばれていたが、現在の呼称は「しぎたつ庵」。大磯の史跡の特徴はJR大磯駅から南下して東海道に突き当たった地点を境にして、それ以东には一里塚跡、江戸見附跡、北組問屋場跡、小島本陣跡、尾上本陣跡、化粧井戸跡、嶋立庵等が並んでいる。

一方その先を西に向かえば「海水浴場発祥の地」、「新島襄終焉の地」、「湘南発祥の地」、伊藤博文の旧居の滄浪閣、旧山内邸、旧徳川邸、旧山県邸、旧沖邸、旧大隈邸、旧西園寺邸、旧池

田邸、少し間を置いて吉田茂の旧邸へと続き、東海道の遺跡は全く出てこない。

小田原宿（9番目）も多様な顔を持つ宿場。まず小田原城。この城に拠って風雲児北条早雲から5代に亘って関東に威を振るった。「小田原征伐」と言えば秀吉が北条氏政、氏直親子（4、5代）を降した戦いであり、「小田原評定^{ひょうじょう}」と言えばその際城中で、評定が長引いて決しなかったことから出た語。黒田節に「日の本一のこの槍」と歌われているのは、小田原征伐の功績で福島正則が秀吉から拝受した名槍。元祖イッキ飲みの黒田藩の豪傑藩士が飲めないと偽って、その槍をまんまとせしめたエピソードを持つ。江戸時代になると関東地方防御の要として、名城の名はさらに高まった。



(歌川広重 小田原宿)

そんなお城を愛する市民の気持ちか、歩いてみるとひしひしと感じとれる。藤沢と同じく東海道には至って冷淡で、宿場としての遺跡は殆ど皆無。代わりに城下町としての顔を重視している証拠は随所に見られた。一例を示そう。「山角町」とある碑の別の面には「江戸時代前期、城の大手口変更によって東海道が北に付け替えられた時に出来た新町。町は藩主帰城の時の出迎場であったほか、郷宿（藩役所などへ出向く村人が泊る宿屋）や茶店があり、小田原提灯づくりの家もあっ

た」（原文のまま）と、実に詳しい。同じ形の同じスタイルの碑が街角ごとに建っているのである。今の説明文にも出てきた「小田原提灯」も、童謡の「おさるのかごや」で知名度は全国区。この地の人の発明になる折りたたみ式の提灯で、不用のときは腰にさしたとは、広辞苑の説明。今でも居並ぶ蒲鉾の製造販売店、小売店に交じって小田原提灯手作りの店が健在であった。



（歌川広重 箱根宿）



（歌川広重 三島宿）

箱根馬子唄の歌詞にもある箱根八里とは小田原宿から箱根宿（10番目）経由で三島宿（11番目）までの八里（32キロ）の山道を指す。このうち小田原宿から箱根峠までを東坂、峠から三島宿までを西坂という。滝廉太郎作曲の『箱根八里』に、「箱根の山は天下の険 函谷関も物なら

ず 万丈の山千仞の谷…」とある「天下の険」とは、日本で最も山が険しくて通行の困難な所という意味。事実峠までの東坂で私のデジカメに収まっているだけでも観音坂、葛原坂、女転し坂、割石坂、大沢坂、西海子坂、七曲り、檀木坂、猿滑り坂、白水坂、天ヶ石坂、追込坂、権現坂、向坂等の難所がずらり。その他国指定の旧道（石畳）が7ヶ所ある。「女転し坂」とは女性があまりの急坂に落馬して死亡した坂。箱根馬子唄の1番の歌詞は上記権現坂付近のどでかい自然石に刻まれているが、字が薄く見落としがち。東海道は松並木と相場が決まっている中、箱根では杉並木が壮観。樹齢350年の杉が400本以上、30メートルの高さで聳えている。先の滝廉太郎作曲の歌詞にも「昼なお暗き杉の並木 窈窕の小径は苔滑らか」と続く。

なお峠までの東坂は相模の国で、西坂は伊豆の国。西坂を下り始めてすぐ「夢舞台」の道標があた。これは上に横書きで「夢舞台東海道」と記し、その下に現在の地名を縦書きで記し、その下に矢印で左右の宿場名とそこまでの距離を丁（約100メートル）の単位で記した表示板で、静岡県内のみ東海道の要所要所に設置されていて、どれだけお世話になったことか。この道標ですでに三島宿に差し掛かっていることを知った。下る途中の富士見平の地名の横に、「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」の巨大な芭蕉句碑。さらに下り山中城跡に近い道端に「雲助徳利の墓」と刻まれ、杯と徳利が浮き彫りにされた珍しい墓が。終生酒を愛した雲助の棟梁の死を悼んで仲間や土地の人々によって建てられたという。